勝林寺寺報

観見諸仏浄土因　国土人天之善悪
建立無上殊勝願　超発希有大弘誓

人の暮らしているこの世界、この地球の上には「国」というものがあります。世界には196もの国があるそうで、それに加えて未承認のものもいくつかあるようです。国があるということはそこに境があり、国民がいて国家がある。どの国が良くてどの国が悪いのか、できれば一番良い国に誰もが暮らしたいものですが、国境を超えることはそう簡単なことではありません。実際に大きな壁を作って人の行き来を拒んでみたり、海や川に隔てられて守ってみたりしますが、いつもその境の線をめぐって主張がぶつかり合い、戦争の火種となってきました。近年では、情報通信技術の発達とともに国の境の意味が薄れ、それがまた複雑な社会混乱を招いているようです。

浄土真宗の門徒は親鸞聖人のみ教えのもとに、「仏説無量寿経（大経）」を根本の経典として念仏の道を歩んでいきます。この大経には阿弥陀様の四十八の願が誓われており、その中でも第十八番目の願いが念仏往生の誓われた「本願」として、私たちの信心のかなめとなるものです。ただ、ほかの願も阿弥陀様の切なる願いであり、第一願から第十一願までは「人土成就の願」といわれ、自分の作る国の社会はこんな風でいたいという、国家建立の理念が誓われています。自由で、平等で、便利な真実の国です。すなわち、その国の中の「土」と「人」と「天」とがほかの国と比べ物にならず、浄であり、楽である極楽浄土の国の建立を誓われているのです。この浄土を願い、念仏して仏様の国に生まれさせていただくのが私たち念仏者です。しかし、私たちが今現実に生きている世界は、アメリカも、中国も、そして日本も、「土」も「人」も「天」も汚れた五濁悪世悪世界で、理想の社会はどこにもありません。そのことをつい忘れながら、私たちは日々の生活を送ってきているのではないでしょうか。

新型コロナウイルスがこの社会にあらわれて一年が過ぎました。世界中、国境封鎖の甲斐もなく国の境目なく広がり、今なお終息の目途がつきません。そしてこの分断は国ばかりでなく、人と人との生活の中でも深まり、いよいよ仏教の教えの基本である四苦八苦が日常の生活の中に顕在化してきているようです。

四苦八苦とは、仏教における苦の分類です。根本的な苦を生・老・病・死の四苦とし、加えて、愛別離苦（あいべつりく）・愛する者と別離すること・怨憎会苦（おんぞうえく）・怨み憎んでいる者に会うこと・求不得苦（ぐふとくく）、求める物が得られないこと・五蘊盛苦（ごうんじょうく）・五蘊（人間の肉体と精神）が思うがままにならないこと、の四つの苦を合わせて八苦と呼びます。

人はこれからも知恵を絞り、科学・医療を発達させ、政治・社会を変革しながら未来に進んでいかなければなりません。その進む方向は今急速に転換しないといけなくなっています。阿弥陀様の建てられた国をモデルとして少しでも理想にこの国を近づければと思うのですが、やはり今生の苦はなくすことはできません。やはり私たちは念仏の中で、阿弥陀様の建てられた国に生まれることを待たなければなりません。

（文責　住職）

ご報告

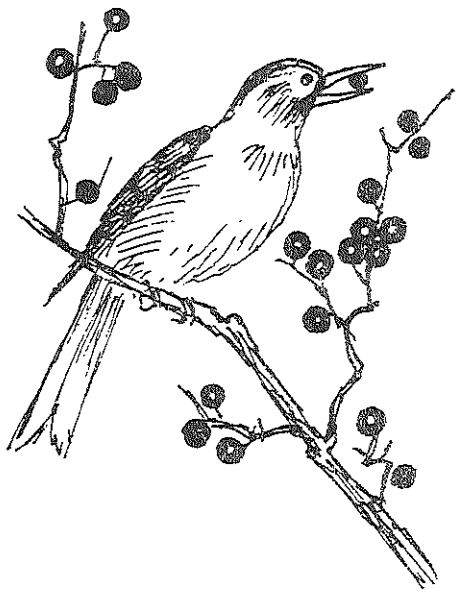
令和三年度総代会開催

新年度の総代会が開催され、本年度の行事計画や予算の提案などがありました。その際、緊急事態宣言再発令時であり、代議員会は書面審議とすること、合わせてその後の仏壮仏婦の総会、評議員会も同様に行うことを申し合わせました。代議員会資料を送付し審議していただいた結果、原案通り承認され、新年度のスタートを切りました。

《令和三年度主な行事計画》

二月　六日　仏壮総会（書面審議）
　　一一日　仏婦評議員会（書面審議）
三月二〇日　春彼岸会・仏婦総会・合同役員会
四月一〇日　観桜会
五月二二日　降誕会
六月一三・一四日　納骨研修旅行
七月七・八日　永代経
八月　八日　全戦没者追悼法要
九月二三日　秋彼岸会・合同役員会
十月一六日　敬老報恩講
一一月二二・二三日　報恩講
一二月二七日餅つき
　　三一日除夜会

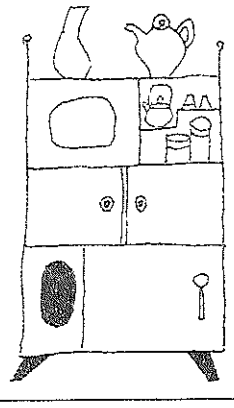
＊但し、感染状況によって中止や変更があります。その都度、寺報などで事前にお知らせいたします。



二月　勝林寺　予定

六　日（土）　勝林寺　仏壮総会
　　（書面審議）
七　日（日）　蔭山文子宅　三回忌
八　日（月）　藤川多かる宅　一七回忌
一一日（木）　勝林寺　仏婦評議員会
　　（書面審議）
二六日（火）　みのりを聞く会
二七日（土）　坂本政司宅　忌明法要

（敬称略）



葬儀

令和二年一二月四日
出石町和屋　成田清野様　九八歳
一二月七日
正福寺前住職　山﨑済朗様　七九歳
八鹿町上小田　濱　秀雄様　八五歳
一二月一二日
但東町栗　兼井通夫様　八九歳
一二月一四日
但東町奥小谷　澤田はつ代様　九二歳
令和三年一月一四日
出石町坪口　坂本政一様　九四歳
一月二四日
出石町坪口　中嶋いと様　七八歳

勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424

（「真宗入門」17.ページよりつづき）

かくまでに情報がはんらんし、価値観が混乱して、次第にものの真相が見えにくくなっている現代の社会状況にあって、私たちの得る選びの行為は、たしかに成り立ちえているのでしょうか。わたしたちは時に、まったくどうでもいいようなものを、やがては色あせて何の価値もなくなるようなものを、人生の一大事と思いあやまり、人と争いながら、血眼になって求めてはいないでしょうか。そしてまたその反対に、ほんとうに貴重なもの、自分の人生にとってかけがえのない大切なものを、心浅くも見過ごしてはいないでしょうか。やがて私たちは死んでゆかねばなりませんが、その時に、自分の人生の旅路を振り返って、この人に会えてほんとうによかった、この宝を手に入れることができて、ほんとうにしあわせだったと思えるような、まことの選びをたしかにもちえているでしょうか。もしも自分の人生の最後において、自分の生涯をふりかえって、ほんとうに満足しうるような選びが、何一つとしてなりたっていなかったとするならば、その人生はあまりにもみじめであり、無意味だというほかはないでしょう。このように私たちの人生が、その生涯をかけての選びの人生であるとするならば、私にとって選び棄てるべきものは何か。また選び取るべきものは何でしょうか。いよいよ混沌としてゆき、見通しの困難な現代社会に生きる私たちは、おたがいに心深く自分の人生の足元を再省し、その行路について沈思しつつ、いっそう心をこめ、眼を見開いて生きてゆきたいものであります。

ある真宗の妙好人にまつわる物語として、こんな話を聞いたことがあります。この人は村でも評判の信心深い爺さんでありました。しかしながら、この爺さんは世間的にはたいそううとくて、貧乏暮らしが身につき、とうとう妻を迎えることもできませんでした。ある時、村の若い者たちが、この念仏爺さんをからかって、

「爺さん、あんたは念仏をよろこんで有難い人だといわれているけれど、人間としてはまったく値打ちのない男だよ。とうとう嫁さんももらえなかったじゃないか」

といいました。そして、もう一人の若者は、

「まあ、あんたはお金で言えば、穴あき一文銭みたいなものだなあ」

といって、笑い合いました。念仏爺さんは、この若者たちのからかいの言葉を、眼をしばたきながら聞いていました。そして、

「うん、そうかもしれないな、おれは穴あき一文銭だな。ところで、あんたたちはおかねにしたらどれくらいになるのかな」

とたずねました。この言葉にこたえて、一人の若者が胸を張っていいました。

「爺さん、おまえが一文銭なら、おれたちはさしずめ、金ぴかの小判というところだな」

念仏爺さんは、大きくうなずきながら若者たちの意見に賛成の意を表明しました。やがてこの若者たちが退ちさろうとしたとき、念仏爺さんは若者たちを呼び止めて、

「あのなあ、まことあんたたちがいうように、おれは一文銭、おまえらは小判。人間の値打ちはそれほどちがうかも知れないが、おれの一文銭はまん中に穴があいているで、いつも向こうが見えてるんや、でも小判には穴がないで向こうが見えないぞ。あんたたち、足もとに気を付けて歩けや」

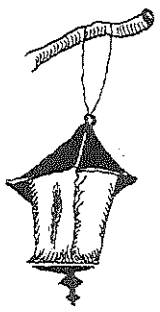
といったと伝えております。うぬぼれ若者にあたえた、きびしい頂門一針の言葉でありましょう。私自身の人生における選びの営為を振り返らずにはおれません。（次号に続く）

（信楽俊麿『真宗入門』より引用）

法語カレンダー二月

念仏者の人生は

まさに　慚愧と歓喜の交錯



梯　實圓

仏の教えは、仏・如来のありようを「親」によく譬えて示されます。過去の「私」を振り返りつつ、未来の「私」を見据えつつ、今現在を生きることが大切です。そのことはわかっていても、自己中心的な「私」は身勝手な欲望のままに目の前のことしか見えていません。そんな私を見捨てることなく、いつでもどこでもはたらき続けているのが「親心」です。それをもって仏・如来の心を譬えるのです。しかも、常に「私」を見捨てることなく寄り添い続ける「親心」がわからないまま、「今」を生きています。その「親心」に何かの縁で触れて気づいたとき、「かたじけない」という「歓喜（かんき）」と「もうしわけない」という「慚愧（慚愧）」があるのです。これが「ご恩」の内実だと思います。

一方、この娑婆での親自身は、この苦悩多き世界の愚かな人間でしかありません。しかし仏・如来は、過去を含めた今現在の身勝手な「私」をまるごと「わが子」と認めて寄り添ってくださり、その「私」のいのちの往く先まで寄り添ってくださるのです。それが「智慧」に裏付けられた「慈悲」なのです。

私の称える「南無阿弥陀仏」とは、今を生きる身勝手な「私」を丸ごと認めてくださる「親心」なのです。お浄土から「必ず救う」と喚び覚まし続ける「親」の名告り（名号）なのです。聞法生活の中で、この身勝手な「私」にかけられた如来の智慧と慈悲、すなわち阿弥陀さまの「親心」を聞信して、ご恩のひとつでも気付かせていただきましょう。

（「月々のことば」より抜粋）

どすん

BSで放送している「まいにち養老先生とときどきまる」という番組が好きです。養老先生は「バカの壁」で有名な解剖学者。「まる」は先生と一緒に暮らす猫。「金言」にちょっと毒もまぜる養老先生のわきを通り過ぎるまるのゆるーい感じがとってもいい。でも、昨年一二月、一九歳を目前にしてまるは亡くなりました。その時「まるは、うちに来てから亡くなるまで私に何かしてくれたことなどない。ドアを開けろ、そとに出せ、餌を入れろ・・私はまるのために多くのことをしてきたが。しかし、それでよかった、まるはそこにいるだけでよかった」という趣旨の先生のコメントが掲載されました。この言葉から、まるが先生からすごく愛されていたことが痛いほど伝わってきました。周りに媚びたり、無理をしてすり寄ったりすることなく自然体で生きて「そこにいるだけでいい存在」であったまる。いいなぁ、そんな風になりたいなぁと思っていた時に、偶然読んだ雑誌にこんなことが書かれていました。

「幼い子供は周りの大人から不断に援助されなければならないが、ただ与えられているだけかというとそうではない。やがて大きくなれば与える側に回るからではない。生まれたばかりの子供でも与えられるものがある。それは「幸福」である。子供がいるだけで周りの大人はうれしいのである。幼い子供は幸福を与えようとはおもっていない。誰もが自分が幸福であれば、その幸福は必ず他者に伝わっていくのである。高齢になり、身体が弱っても、そのことで自分が不幸だと思わず、日々生きる喜びにあふれている幸福な人は、幸福を家族にあたえるだろう。」なるほど。まるは何もしなかったけど、先生のそばでとても幸福だったから、その幸福が一緒に暮らす先生に伝わり、先生を幸福にしていたんだね。いいなぁ。（文責　坊守）